

女性農業労働者の労働供給

—19世紀イングランドにおける一農場の事例—

山 本 千 映

要 約

イギリス経済史において比較的等閑視されてきた女性賃金労働者について、その労働供給の側面を定量的に把握することが本稿の目的である。イングランドのミッドランド北部、スタッフォードシャーに位置するトレンタム農場には、1848年から1856年にかけて雇用されていた労働者について、労働者の名前、職種、その日の出欠、賃金率など、詳細な情報が賃金台帳の形で残されている。この史料の分析を通じて、以下の3点が明らかにされる。1) トレンタム農場で雇用されていた女性労働者の年間労働日数は比較的長く、先行研究が示すよりもずっと安定的に雇用されていた、2) 農業の季節性による労働需要の変化は、男性労働者については雇用者数の増減によって調整されているが、女性労働者は週当たりの労働日の増加という形で行われた、3) 農場で雇用されている女性労働者のうち、夫が同じ農場で働いている場合は、出産・育児に際して、就業がかなり柔軟に対応されていた。

キーワード：トレンタム；賃金台帳；女性労働；農業労働者
 経済学文献季報分類番号：04-43；15-22

1. はじめに

イギリス経済史において、女性労働はずっと等閑視されてきた。1974年に刊行された「1700年以降の英国経済史における女性：一つの解釈」と題する論文の中で、リチャーズは、産業革命期以前には、女性の経済的役割が非常に大きかったが、工業化過程の中で女性の労働力率は低下し、20世紀半ばになるまで回復されなかったと主張したが¹⁾、依拠すべきデータについては、「悲しいことに、統計データが女性の経済への参画についてあいまいでない形で示すようになるのは19世紀も終盤に至ってのことで」あり、「より優れた資料が無い状況では、歴史家は断片的な統計資料や叙述的なデータを扱う他無い」と述べている²⁾。20世紀初頭から数量的な研究が存在し、Lindert and Williamson (1983) のように、非熟練労働

1) Richards (1974), pp. 338, 342.

2) Richards (1974), p. 344.

者だけでなく、ホワイトカラーの労働者も含めた実質賃金推計が1980年代初めになされている成人男性とは異なり、女性労働についての本格的な定量的アプローチがなされるようになったのは、ごく最近のことである。

他方で、1980年代以降の定量的な諸研究においても、一般化にはほど遠い状況が続いている。例えば、定住法の審査資料を用いて女性の農業労働の季節性を示した Snell (1985) によれば、穀作的な南部と牧畜が支配的な西部とでは、失業の季節性に違いがあったとされている³⁾。また、1,000を超える家計調査タイプの史料を組織的に収集し、世帯所得に対する女性の貢献について分析したホレルとハンフリーズは、19世紀初頭の男性による所得の上昇が婦女子による所得の減少によって相殺され、全体としての家計所得は男性所得の伸びほどには成長しなかったという一般的な趨勢を示したが、同時に、職業ごとの所得格差は男性の所得格差以上に拡大したこと、言い換えれば、女性や子供の就業機会が地域や夫の職業によって非常に多様であったことも指摘している⁴⁾。センサス個票とセンサス以前の住民書上げ史料を用いた Saito (1979) では、労働力率の年齢プロファイルが描かれており、工業化の進展にともなう女性の労働力率の低下が示されているが、ここでも、その地域における農村工業の消滅により、既婚女性の労働力率が劇的に低下した教区と、低下が比較的軽微だった教区とが対照的に描かれている。

個別農場の賃金台帳を用いた事例研究からも、女性労働の多様性が伺われる。シェフィールド近郊のオックス農場 the Oakes を分析した Burnette (1999) は、産業革命期を通じて女性労働に対する需要が相対的に低下し、他の就業機会の消滅とあいまって、貧困層に属する世帯では、女性の男性核所得者への依存がいつそう強まったとしている。他方で、Verdon (2002a) では、ノーフォークのアーシャム (Earsham) 農場とヨークシャーのソルトマーシュ (Saltmarshe) 農場との比較がなされており、19世紀前半に前者において女性労働者数が減少しているのに対し、後者ではほとんど変化が見られなかったことが示されている⁵⁾。

こうした状況を踏まえて、ヴァードンは、「19世紀のイングランド農業における女性労働は一定の普遍的な特徴を示すけれども、労働投入量や労働のタイプ、また、支払われていた賃金のレベルの地域格差が残存していたことから、無限定の結論に到達することは難しいままである」と述べている⁶⁾。換言すれば、一般化のための個別事例研究が、未だ不足している状態にある。

3) Snell (1985).

4) Horrell and Humphries (1992). そこでは、夫の職業が high-wage agriculture、low-wage agriculture、mining、factory、outwork、trades、の6つのカテゴリーに分けられている。

5) Verdon (2002a), pp. 98-106.

6) Verdon (2002b), p. 131.

本稿では、サザランド公爵家によって所有されていたトレンタム農場の賃金台帳を用いて、19世紀中期イングランドにおける女性農業労働者の労働供給行動の一側面を明らかにする。イングランドのミッドランド北部、スタッフォードシャーに位置するトレンタム農場には、1848年から1856年にかけて雇用されていた労働者について、労働者の名前、職種、その日の出欠、賃金率など、詳細な情報が残されている⁷⁾。分析を通じて、以下の3点が明らかにされる。1) トレンタム農場で雇用されていた女性労働者の年間労働日数は比較的長く、先行研究が示すよりもずっと安定的に雇用されていた、2) 農業の季節性による労働需要の変化は、男性労働者については雇用者数の増減によって調整されているが、女性労働者は週当たりの労働日の増加という形で行われた、3) 農場で雇用されている女性労働者のうち、夫が同じ農場で働いている場合は、出産・育児に際して、就業がかなり柔軟に対応されていた。

以下、第2節で年間労働日数について、第3節で週当たり労働日数について、第4節で女性労働者の世帯構造について分析し、第5節でまとめる。

2. 女性労働者の臨時的性格

オークス農場の賃金台帳の分析から、ジョイス・バーネットは「女性日雇労働者は、干草作りの短期間のみ働いていた者がほとんどであった。それ以上働いた者もいたが、それでも冬期には働かなかった。それとは対照的に、男性労働者は年間を通じてフルに働いていた」と結論した⁸⁾。トレンタムでは性別による違いはさほど「対照的」ではなかったようである。バーネットは、臨時労働者の定義を、年間の労働日数が60日未満の者、としているが、1840年に男性カジュアルワーカーは男性総労働投入の10.1%を満たすのみであったのに対し、女性カジュアルワーカーのそれは45.5%に上ったことを示している⁹⁾。彼女の定義に従い、トレンタムのデータを用いて同様の計算を行った結果が、表-1である。1849年、1850年、1854年および1855年の四年間については、女性の雇用はバーネットの主張どおり、非常に短期的である。カジュアルワーカーの労働日数が総労働日数に占める割合を見ると、男性労働者と異なり、これらの年次では高い数値となっている。しかしながら、他の年次では状況は逆で、平均年間労働日数では男性に及ばないものの、必ずしも全般的な女性労働の臨時的性格を結論付けることはできない。

7) 用いる資料は、Staffordshire Record Office (hereafter SRO), D593/N/2/3/24である。資料と農場の詳細については、山本(2002)、6-10頁を参照。なお、資料は1848年2月26日から始まり、1856年5月8日で終わっているため、1848年と1856年のデータは分析から省いた。

8) Burnette (1999), p. 45.

9) Burnette (1999), Table 4, p. 50.

キース・スネルは、バーネットとはまた違ったイメージを描き出している。彼は、定住法審査(rural settlement examinations)を用いて、穀作に特化したイングランド南東部と、より畜産が盛んな西部について、男女それぞれの雇用の季節性について示した¹⁰⁾。ケンブリッジシャー、ベドフォードシャー、ハンティンドンシャー、ノーフォーク、サフォーク、エセックス、ハートフォードシャー、バークシャー、バッキンガムシャー、ノーサンプトンシャーからなる南東部諸州では、1835-60年の時期においては、女性の季節的失業は男性同様深刻であった。彼の用いた指標は、各月の査問を受けた人の割合である。もし、査問が年間を通じて一様に分布しているならば、各月のパーセンテージは8.33% (=1/12)となる。男性については、4%を若干下回るレベルからほぼ13%までの間であり、女性の場合は、4.7%程度から12.5%ほどであった¹¹⁾。雇用のピークは男性が7月、女性が4月と男女間で異なるものの、変動の範囲は男女ともほぼ同様のものであった。他方、モンマスシャー、ヘリフォードシャー、ウスタシャー、シュロップシャー、グロスターシャーの西部諸州では、変動幅はより小さい。1780-1834年の時期では、年間を通じてパーセンテージは6~11%の間におさまっている。とりわけ、女性の雇用に関しては、バーネットがオックス農場で示したものとはずいぶん異なっており、年間を通じてほとんど変動がない。男性の失業率は、1月に若干上昇するが、女性については明確なピークが存在しない。

バーネット、スネル、そして本稿で示された3つのケースが各々異なっている理由として、1) 用いた史料の違い、2) 労働者の行っている作業の違い、3) 農場規模の違い、の3点が考えられる。第一点目と第二点目は、スネルの結果とバーネットおよび本稿の結果との違いに影響を与える。というのも、定住法審査は農場労働者のみを対象にしたものではなく、その教区の教区民全員を対象にしたものであるからである。スネルは都市部の教区を除いてはいるが、教区民全員ということになると、必然的に農業以外の職業に従事している者も含まれることになる。このことにより、季節性は薄まるであろう。また、教区民の大半が農業関連の職業に従事していた場合でも、住み込みのサーヴァントが日雇労働者よりも多かったならば、同様の影響が出る。農場サーヴァントと農業労働者が行っていた作業は、実質的にはほぼ同じものであったが、雇用の形態は異なっていた。農場サーヴァントは普通一年契約で雇用されるため、契約の期限が来るまでは、雇用者が恣意的に解雇することは、原則的にはできなかった。このことは、西部において、雇用が年間を通じて一様に分布していたことの一因であろう。

10) Snell (1985), Figures 1.1, 1.2 and 1.16, pp. 20, 21, and 48.

11) 残念ながら、スネルは正確な値を表としては与えていない。本文中で言及したパーセンテージは彼のグラフから読み取ったものである。

表-1 カジュアルワーカー、レギュラーワーカーによる労働日数

男性

	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
レギュラーワーカー (a)	11,136.75	12,593.00	13,727.00	14,060.50	14,578.25	13,903.75	13,544.42
カジュアルワーカー (b)	730.25	907.75	991.75	1,423.75	1,202.25	721.25	575.00
合計	11,867.00	13,500.75	14,718.75	15,484.25	15,780.50	14,625.00	14,119.42
(b)/((a)+(b))	6.2%	6.7%	6.7%	9.2%	7.6%	4.9%	4.1%
労働者数	82	96	103	134	121	79	72
平均労働日数	144.72	140.63	142.90	115.55	130.42	185.13	196.10

女性

	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
レギュラーワーカー (a)	2580.50	2477.50	1650.25	1769.50	2448.00	2833.25	3097.75
カジュアルワーカー (b)	537.00	433.00	45.00	70.25	120.50	309.50	402.75
合計	3117.50	2910.50	1695.25	1839.75	2568.50	3142.75	3500.50
(b)/((a)+(b))	17.2%	14.9%	2.7%	3.8%	4.7%	9.8%	11.5%
労働者数	44	31	16	16	24	32	37
平均労働日数	70.85	93.89	105.95	114.98	107.02	98.21	94.61

男女計

	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
レギュラーワーカー (a)	13,717.25	15,070.50	15,377.25	15,830.00	17,026.25	16,737.00	16,642.17
カジュアルワーカー (b)	1,267.25	1,340.75	1,036.75	1,494.00	1,322.75	1,030.75	977.75
合計	14,984.50	16,411.25	16,414.00	17,324.00	18,349.00	17,767.75	17,619.92
(b)/((a)+(b))	8.5%	8.2%	6.3%	8.6%	7.2%	5.8%	5.5%
労働者数	126	127	119	150	145	111	109
平均労働日数	118.92	129.22	137.93	115.49	126.54	160.07	161.65

女性労働者の労働日数が総労働日数に占める割合

	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
レギュラーワーカー	18.8%	16.4%	10.7%	11.2%	14.4%	16.9%	18.6%
カジュアルワーカー	42.4%	32.3%	4.3%	4.7%	9.1%	30.0%	41.2%
合計	20.8%	17.7%	10.3%	10.6%	14.0%	17.7%	19.9%

Source: SRO D593/N/2/3/24.

Note: 男性労働者には出来高払いの労働者は含まないが、少年 (boys) は含む。

オークス農場とトレンタム農場の二つについては、前述の第一点目は問題とはならない。というのも、両者とも賃金台帳という同じ種類の史料を用いた分析であるからである¹²⁾。加

12) レディング大学図書館附属の文書館には、Historical farm record collection があり、「Webb's Practical Farmers' Account Book」や、「Jarrold's Practical Farmers' Account Book」といった、刊行された標準的な会計簿というものが、とりわけ19世紀に数多く見受けられる。トレンタム農場の賃金台帳は刊行

えて、実際に行われていた作業自体も、二つの農場とも同じようなものであったらと思うられる。オークスは畜産を主としていたが、トレンタムもまた、穀作とともに畜産も盛んであった¹³⁾。しかしながら、両農場の規模は、大きく異なる。1842年時点では、オークス農場を所有・直営していたバグショウ家 (the Bagshaw family) は、839エーカー所有しており、オークス農場は、9.3エーカーの建物と庭、97.3エーカーの農場、116.4エーカーの森からなっていた¹⁴⁾。他方で、1857-58年にトレンタムで行われた測量によると、トレンタムエステートは約2,510エーカーにもものぼり、直営農場に当てられていたのは450エーカー以上であった¹⁵⁾。人日で見た総労働投入量で見ても、トレンタム農場の巨大さがわかる。1840年のオークスでは、2,905.25人日であったのに対し¹⁶⁾、トレンタムのそれは1853年で18,349.00人日にも達し(表-1参照)、オークスのほぼ6倍である。また、オークスで1840年に60日以上働いた女性はただ一人であったが¹⁷⁾、トレンタムではより多くの女性が年間を通じて働いていた。

表-2 年間労働日数による女性労働者の分布

労働日数	1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855
300+	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
250-299	0 (0%)	1 (3%)	1 (6%)	1 (6%)	1 (4%)	1 (3%)	0 (0%)
200-249	1 (2%)	0 (0%)	2 (13%)	2 (13%)	3 (13%)	3 (9%)	3 (8%)
150-199	2 (5%)	7 (23%)	2 (13%)	2 (13%)	3 (13%)	6 (19%)	6 (17%)
100-149	7 (16%)	6 (19%)	4 (25%)	5 (31%)	5 (22%)	5 (16%)	8 (22%)
50-99	17 (39%)	7 (23%)	1 (6%)	0 (0%)	6 (26%)	5 (16%)	7 (19%)
-49	17 (39%)	10 (32%)	6 (38%)	6 (38%)	5 (22%)	12 (38%)	12 (33%)
計	44 (100%)	31 (100%)	16 (100%)	16 (100%)	23 (100%)	32 (100%)	36 (100%)

Source: SRO D593/N/2/3/24.

バーネットの主張との食い違いは、おそらく、労働投入の計測方法の違いと「カジュアルワーカー」の定義の違いも大きい。労働投入を人日で計測する場合、臨時的な労働者の貢献

↓されたものではないが、ウェブやジャロルドのものと同様である。おそらく、オークスのそれも同様であろう。

13) 1834年の月例会計簿 (Monthly Account Books : the General Monthly Reports (SRO 593/L/ 6 / 2 /16) の一部) は、同年にトレンタム農場では「去勢馬」、「去勢牛」、「雌牛」、「若雌牛」、「子牛」、「羊」、「雄羊」、「去勢羊」、「雌羊」、「子羊」、「豚」、「屠殺した scotch bullocks」、「羊皮」、「羊毛」、「獣脂」および「小麦」が販売された、としている。この1834年の会計簿には販売に関する記載が80件あるが、497ポンドのスコッチウールについては、金額が記載されていない。これを除くと、小麦の販売額は全体の5.5%にすぎない。スコッチウールの価格を Cheviot wool と Leicester wool の平均価格 (2s. 3d.) とすると、パーセンテージは5.3%まで下がる。いずれにせよ、畜産物の販売高が圧倒的なことは変わらない。この販売品リストは、オークスのそれとほぼ同じような構成になっている。Burnette (1999), pp. 46-47.

14) Burnette (1999), Table 1, p. 46.

15) より詳しくは、山本 (2002)、表2、10頁を参照。

16) Burnette (1999), Table 4, p. 50.

17) Burnette (1999), pp. 51-3.

分は当然ながら少なくなる。臨時労働者は、その労働日数が少ないから臨時労働者なのである。こうした方法では、臨時労働者とそうでない労働者を区別する境界の確定が不可欠となるが、バーネット自身、年間労働日数60日未満という彼女の定義が、若干恣意的であることを認めている。また、結果的に、臨時労働者の労働投入が総労働投入に占める割合は小さくなることは避けられない。表-2は、労働者を労働日数にしたがって50日ごとに7カテゴリーに分類したものであるが、これによると、年間労働日数が300日を超える女性労働者こそ、トレンタムにはいなかったが、200日を越える者は存在した。年間の日曜日の数を53とし、365日から日曜日を除いた312日の半分以上、つまり156日を越えて働いている者をレギュラーワーカーとすると、トレンタム農場で働いていた延べ119名の女性労働者のうち26名(21.8%)が、レギュラーワーカーとして同定できる。また、男性と異なり、女性労働者の労働日数は労働者によってかなりばらつきがあった。男性労働者に関しては、特定の労働者が年間300日以上働き、他の多くの労働者は年間50日未満の労働日数となっている¹⁸⁾。これに対し、女性労働者の年間労働日数は、労働者によってばらつきが大きく、50日未満の者が多いという傾向はあるものの、200日以上と50日未満の者、というような明確な対照は見られない。

1830年代、40年代のオックス農場でもっとも年間労働日数が長かったのは、Elizabeth Dysonである¹⁹⁾。彼女にとってもっとも忙しかったのは1843年であり、労働日数は163.5日に達した。1836年から1845年までの平均年間労働日数は109.1日であった²⁰⁾。トレンタム農場では、Elizabeth Machinがもっとも忙しい女性労働者であったが、Elizabeth Dysonよりずっと年間労働日数が長かった。表-3を見ると、彼女は7年間を通じて年間200日以上働いており、1854年の労働日数は297.5日に達している²¹⁾。加えて、1840年にElizabeth Dysonが「女性の総労働日数の半分は働いていた」²²⁾のに対し、1854年でみてもElizabeth Machinの労働日数は、全体の9.5%にすぎない。したがって、トレンタムでは他の女性労働者も比較的レギュラーに働いていたと言える。表-2で見たように、年間100日以上働いた

18) 山本(2002)、図1、14頁。

19) Burnette(1999), pp. 51-3, especially Table 6, p. 53.

20) バーネットは、Elizabeth Dysonの労働日を1836年から45年までの各年次について示しているが、1836年は、彼女の労働日数は収穫期のみ1.5日にすぎない。おそらく、この年が彼女が初めて農場で働いた年であろう。本文の平均年間労働日数は、この年の数値を除いて計算してある。

21) 表-3に示した労働日数は、週間労働日数の計算のため52週=364日間をカバーしているのみである。したがって、各年次の12月31日(閏年の1852年については30、31の両日)は含まれていない。各年次の最下行にある平均値は、表-3の数値を使って計算したものであるため、表-1のそれとは若干異なる。

22) Burnette(1999), p. 52.

表-3 トレンナムにおける女性労働者の労働日数

a) 1849			b) 1850			c) 1851								
no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数			
4	Elizabeth	Machin	201.25	4.03	4	Elizabeth	Machin	276.25	5.31	4	Elizabeth	Machin	263.75	5.07
9	Ellen	Wright	168.75	3.75	9	Ellen	Wright	185.75	4.13	9	Ellen	Wright	217.75	4.19
16	Sarah	Buffey/Boughey	156.75	3.56	8	Prudence	Wood	174.00	3.95	16	Sarah	Buffey/Boughey	206.50	4.05
62	Sarah	Phillips	148.00	3.36	16	Sarah	Buffey/Boughey	172.75	4.02	64	Hannah	Simpson	194.00	4.22
47	Sarah	Marrow	146.25	3.75	62	Sarah	Phillips	168.75	3.84	8	Prudence	Wood	176.00	3.52
8	Prudence	Wood	123.00	3.62	29	Kaziah	Middleton	165.25	3.76	7	Elizabeth	Snappe	143.00	3.76
27	Elizabeth	Davis	107.50	3.47	7	Elizabeth	Snappe	159.00	4.18	1	Sarah	Allen	137.50	4.17
7	Elizabeth	Snappe	107.00	3.45	5	Mary	Middleton	158.75	4.29	2	Elizabeth	Banks	108.25	4.71
15	Mary	Buffey/Boughey	106.50	3.80	1	Sarah	Allen	138.50	3.96	62	Sarah	Phillips	108.25	3.49
22	Mary	Cartwright	102.00	3.78	64	Hannah	Simpson	135.50	4.11	6	Jane	Phillips	92.25	4.19
2	Elizabeth	Banks	97.75	4.65	47	Sarah	Marrow	132.25	4.13	71	Hannah	Snappe	26.75	3.82
75	Sarah	Tilstone	95.75	3.83	22	Mary	Cartwright	126.25	3.41	5	Mary	Middleton	12.00	3.00
66	Matilda	Sinkup	91.75	3.99	6	Jane	Phillips	119.50	4.43	61	Ann	Phillips	4.00	2.00
31	Mary	Fallows	88.75	3.55	2	Elizabeth	Banks	114.50	4.77	17	Sarah	Bratt	1.00	1.00
1	Sarah	Allen	88.25	3.68	71	Hannah	Snappe	91.75	3.82	35	Sarah	Groom	0.75	0.75
71	Hannah	Snappe	85.75	3.43	72	Mary	Snappe	77.00	3.85	29	Kaziah	Middleton	0.50	0.50
74	Jane	Tilstone	83.25	4.16	21	Maria	Carnal(l)	74.75	4.15		平均	105.77	3.28	
10	Elizabeth	Bailey	81.75	4.30	14	Fanny	Booth	57.50	4.11					
79	Elizabeth	Ward	79.25	4.17	57	Elizabeth	Pedley	57.25	4.09					
51	Ann(Sarah?)	Morgan	79.00	3.59	20	Mary	Broad	53.00	2.94					
78	Jane	Walker	76.00	3.17	63	Sarah	Salt	50.50	4.21					
60	Sarah	Perins	70.75	4.72	12	Sarah	Banks	49.00	3.50					
77	Mary	Wagg	66.50	3.50	78	Jane	Walker	35.00	3.89					
82	Sarah	Wood	63.00	4.20	55	Rosanna	Patrick	29.50	2.95					
25	Mary	Craddock	62.50	4.81	65	Hannah	Sinkup/Sinkup	22.50	4.50					
72	Mary	Snappe	59.75	3.73	24	Sarah	Cliff	21.75	4.35					
54	Ann	Patrick	51.25	3.66	43	Harriot	Holt	18.00	3.60					
32	Celena	Ferbs	49.75	4.15	33	Eliza	Field	14.25	2.38					
41	Ann	Hissey	49.00	4.45	53	Ellen	Owen	11.00	3.67					
29	Kaziah	Middleton	48.75	3.25	15	Mary	Buffey/Boughey	9.75	2.44					
55	Rosanna	Patrick	41.25	3.75	42	Eliza	Holt	4.00	2.00					
6	Jane	Phillips	29.75	4.25		平均	93.66	3.83						
11	Jane	Ball	27.50	2.75										
73	Jane	Swanwick	25.00	3.13										
39	Ann	Hill	21.75	3.63										
40	Sarah	Hill	20.50	3.42										
26	Mary	Crutcheley/Crutchley	20.00	3.33										
49	Eliza	Morgan	16.50	2.75										
52	Elizabeth	Owen	16.25	3.25										
68	Alice	Smith	15.25	3.81										
69	Harriet	Smith	15.25	3.81										
59	Mary	Perins, senior	15.00	2.50										
45	Susan	James	12.25	4.08										
70	Sarah	Smith	2.25	1.13										
	平均		70.77	3.66										

d) 1852			e) 1853			f) 1854			g) 1855										
no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数				
4	Elizabeth	Machin	293.25	5.64	4	Elizabeth	Machin	257.00	5.04	4	Elizabeth	Machin	297.50	6.07	5	Mary	Middleton	215.50	4.40
9	Ellen	Wright	234.00	4.50	3	Rachael	Downings	246.00	4.73	5	Mary	Middleton	218.25	5.32	4	Elizabeth	Machin	206.25	5.03
5	Mary	Middleton	209.00	5.23	5	Mary	Middleton	233.75	5.08	31	Mary	Fallows	216.25	4.24	104	Jane	Fallows	203.25	4.73
1	Sarah	Allen	191.75	4.79	8	Prudence	Wood	229.25	4.88	61	Ann	Phillips	208.25	4.53	111	Mary	Radford	180.00	4.19
7	Elizabeth	Snappe	167.25	3.48	61	Ann	Phillips	186.00	4.04	117	Hannah	Taylor	186.50	4.66	115	Elisa/Elsa	Snappe	180.00	4.39
8	Prudence	Wood	147.50	3.69	59	Mary	Perins, Junior	167.75	4.41	59.1	Mary	Perins, Junior	179.25	4.48	93	Ann	Banks	167.75	3.42
6	Jane	Phillips	145.00	4.39	59	Mary	Perins, Junior	150.00	4.55	84	Bridgett	Goodmore	177.00	4.78	108	Martha	Penson	165.50	4.24
3	Rachael	Downings	132.25	4.56	31	Mary	Fallows	144.75	4.26	108	Martha	Penson	161.75	4.37	102	Jane	Mason	163.75	4.09
16	Sarah	Buffey/Boughey	126.75	4.37	6	Jane	Phillips	126.25	4.21	6	Jane	Phillips	159.00	4.30	18	Emma	Brett/Bratt	152.75	4.13
2	Elizabeth	Banks	114.75	4.59	18	Emma	Brett/Bratt	115.75	4.13	104	Jane	Myatt	151.50	4.33	6	Jane	Phillips	149.00	4.14
67	Till	Sinkup	28.75	3.59	2	Elizabeth	Banks	108.00	4.15	8	Prudence	Wood	141.50	3.93	16	Sarah	Buffey/Boughey	148.50	3.54
49	Eliza	Morgan	16.50	4.13	1	Sarah	Allen	100.00	4.76	93	Ann	Banks	137.75	4.05	8	Prudence	Wood	143.25	3.87
28	Ann	Day	13.25	2.65	91	Mary	Phillips	97.50	3.25	16	Sarah	Buffey/Boughey	112.50	4.02	59.1	Mary	Perins, Junior	141.75	4.17
18	Emma	Brett/Bratt	7.00	3.50	21	Maria	Carnal(l)	81.25	4.06	18	Emma	Brett/Bratt	112.50	4.33	100	Sarah	Hargraves	127.00	4.88
62	Sarah	Phillips	3.50	1.75	85	Sarah	Hemmings	72.00	4.80	2	Elizabeth	Banks	110.75	4.43	61	Ann	Phillips	125.75	3.81
34	Sarah	Frost	1.25	1.25	59	Mary	Perins, senior	71.50	4.47	102	Jane	Mason	69.75	3.88	99	Mary	Dunn	105.00	4.38
平均			114.48	3.88	84	Bridgett	Goodmore	61.25	4.38	24	Sarah	Cliff	69.25	3.85	3	Rachael	Downings	96.75	4.84

e) 1853			f) 1854			g) 1855													
no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数	no. 名	姓	年間労働日数	週平均労働日数				
4	Elizabeth	Machin	257.00	5.04	4	Elizabeth	Machin	297.50	6.07	5	Mary	Middleton	215.50	4.40	5	Mary	Middleton	215.50	4.40
3	Rachael	Downings	246.00	4.73	5	Mary	Middleton	218.25	5.32	4	Elizabeth	Machin	206.25	5.03	4	Elizabeth	Machin	206.25	5.03
5	Mary	Middleton	233.75	5.08	31	Mary	Fallows	216.25	4.24	104	Jane	Fallows	203.25	4.73	104	Jane	Fallows	203.25	4.73
9	Ellen	Wright	229.25	4.88	61	Ann	Phillips	208.25	4.53	111	Mary	Radford	180.00	4.19	111	Mary	Radford	180.00	4.19
8	Prudence	Wood	186.00	4.04	117	Hannah	Taylor	186.50	4.66	115	Elisa/Elsa	Snappe	180.00	4.39	115	Elisa/Elsa	Snappe	180.00	4.39
61	Ann	Phillips	167.75	4.41	59.1	Mary	Perins, Junior	179.25	4.48	93	Ann	Banks	167.75	3.42	93	Ann	Banks	167.75	3.42
59	Mary	Perins, Junior	150.00	4.55	84	Bridgett	Goodmore	177.00	4.78	108	Martha	Penson	165.50	4.24	108	Martha	Penson	165.50	4.24
31	Mary	Fallows	144.75	4.26	108	Martha	Penson	161.75	4.37	102	Jane	Mason	163.75	4.09	102	Jane	Mason	163.75	4.09
6	Jane	Phillips	126.25	4.21	6	Jane	Phillips	159.00	4.30	18	Emma	Brett/Bratt	152.75	4.13	18	Emma	Brett/Bratt	152.75	4.13
18	Emma	Brett/Bratt	115.75	4.13	104	Jane	Myatt	151.50	4.33	6	Jane	Phillips	149.00	4.14	6	Jane	Phillips	149.00	4.14
2	Elizabeth	Banks	108.00	4.15	8	Prudence	Wood	141.50	3.93	16	Sarah	Buffey/Boughey	148.50	3.54	16	Sarah	Buffey/Boughey	148.50	3.54
1	Sarah	Allen	100.00	4.76	93	Ann	Banks	137.75	4.05	8	Prudence	Wood	143.25	3.87	8	Prudence	Wood	143.25	3.87
91	Mary	Phillips	97.50	3.25	16	Sarah	Buffey/Boughey	112.50	4.02	59.1	Mary	Perins, Junior	141.75	4.17	59.1	Mary	Perins, Junior	141.75	4.17
21	Maria	Carnal(l)	81.25	4.06	18	Emma	Brett/Bratt	112.50	4.33	100	Sarah	Hargraves	127.00	4.88	100	Sarah	Hargraves	127.00	4.88
85	Sarah	Hemmings	72.00	4.80	2	Elizabeth	Banks	110.75	4.43	61	Ann	Phillips	125.75	3.81	61	Ann	Phillips	125.75	3.81
59	Mary	Perins, senior	71.50	4.47	102	Jane	Mason	69.75	3.88	99	Mary	Dunn	105.00	4.38	99	Mary	Dunn	105.00	4.38
84	Bridgett	Goodmore	61.25	4.38	24	Sarah	Cliff	69.25	3.85	3	Rachael	Downings	96.75	4.84	3	Rachael	Downings	96.75	4.84
86	Ann	Marphey	57.00	3.56	111	Mary	Radford	62.50	3.29	51	Ann(Sarah?)	Morgan	95.75	4.56	51	Ann(Sarah?)	Morgan	95.75	4.56
90	Barbary	Phillips	26.75	3.82	89	Ruth	Parton	61.50	4.10	63	Sarah	Salt	85.00	4.25	63	Sarah	Salt	85.00	4.25
92	Mary	Smith	14.00	4.67	109	Barbery	Popper	52.00	3.71	113	Mary	Randles	75.75	4.21	113	Mary	Randles	75.75	4.21
89	Ruth	Parton	9.75	3.25	63	Sarah	Salt	43.25	3.60	117	Hannah	Taylor	62.50	4.17	117	Hannah	Taylor	62.50	4.17
88	Maria	Parton	9.00	3.00	115	Elisa/Elsa	Snappe	40.50	4.05	114	Lucy	Sinkup	56.50	3.77	114	Lucy	Sinkup	56.50	3.77
83	Sarah	Barr	4.00	2.00	91	Mary	Phillips	38.75	4.84	97	Harriet	Carter	54.00	3.38	97	Harriet	Carter	54.00	3.38
	平均		111.67	4.15	22	Mary	Cartwright	34.25	4.28	23	Lucy	Cliff	53.00	3.53	23	Lucy	Cliff	53.00	3.53
					118	Ann	Withington	34.00	4.25	24	Sarah	Cliff							

者（これは Elizabeth Dyson の働き方と同等とみなせよう）は、1849年から1855年の各々で10名、14名、9名、10名、12名、15名、17名となっている。すなわち、オークス農場でもっとも働いていた Elizabeth Dyson 程度働いていた者は、トレンタムでは珍しくなく、女性労働者のうち2割から6割はそうした労働者であった。

年間労働日数に加えて、週間の労働日数も両農場では異なっていた。Elizabeth Dyson の平均週間労働日数が最長で4.55日だったのに対し、Elizabeth Machin のそれは、1854年で6.07日となっている。ここで、平均値が6以上になっていることは、奇妙に思われるかもしれない。これは、彼女が日曜日にも働いていたことによる。実際、1854年の53回の日曜日のうち、彼女は34回働いていた。彼女は、若干特殊で、他の女性労働者で日曜日にも農場で働いていた者はさほど多くない。代わりに、1.25日という労働日がとりわけ収穫期には多く見られる。Elizabeth Machin を除くと、Mary Middleton が唯一、平均週労働日数が5日を超えている。彼女は当該期間中2回しか日曜日に働いていなかった。しかし、1.25日の労働日は7月、8月にしばしば見られる。このことが、トレンタムにおける女性労働者の週労働日数を長くしているもう一つの要因であろう。パメラ・シャープは、デヴォンシャーとコーンウォールの二つの農場についての分析から、「女性は平均して週2日（これは半日を4回ということもあった）働いていた」と述べており²³⁾、バーネットも彼女の主張を認めている²⁴⁾。しかし、トレンタム農場の女性労働者は、これら南西部の二農場のそれともオークス農場のそれとも異なっていた。1849年から1855年の各年時における平均週労働日数は、各々3.66日、3.83日、3.28日、3.88日、4.15日、4.00日、3.89日と、2日よりもずっと長かったのである²⁵⁾。

3. 夏期における労働強度

このように、トレンタムにおいては先行研究が示してきたものとは異なり、女性労働者の雇用はレギュラーなものであった。しかしながら、男女間で比較すると、やはり女性のほうが季節変動が大きかった。では、その格差はどの程度で、なぜそうした格差が生じるのであろうか。

農業活動にとって、季節性は不可避的なものである。小麦・ライ麦は初秋に、大麦・燕麦は春先に蒔かれなければならない。子羊や子牛の出産はたいてい春であるし、初夏には冬期の飼料のために干草作りがなされなければならない²⁶⁾。当然ながら、トレンタム農場の活動

23) Sharpe (1995a), p. 66.

24) Burnette (1999), p. 53.

25) SRO D593/N/2/3/24より直接計算。

26) Overton (1996), pp. 11-15.

もこうした季節性に規定されており、1848年には、大麦・燕麦は3月と4月に蒔かれ、干草作りは7月、8月であった。小麦は8月、燕麦は8月から9月にかけて、大麦は9月に収穫された。その後、次の農業年が10月11月の小麦の種蒔きで始まるのである²⁷⁾。

農業の季節性の影響は、女性の雇用においてのほうが男性よりも大きかったようだ。図-1は、月別の労働投入を、年間総労働投入の1/12を100として示したものである²⁸⁾。影付きの太線で示した男性の労働投入の季節変動をみると、ピークは7月にあり、月平均の5割増弱であった。他方、女性の労働投入は集中の度合いが著しい。指数を見ると、女性の場合少なくとも150であり、1849年には250に達する²⁹⁾。

図-1 トレンタム農場における女性の労働投入(指数)

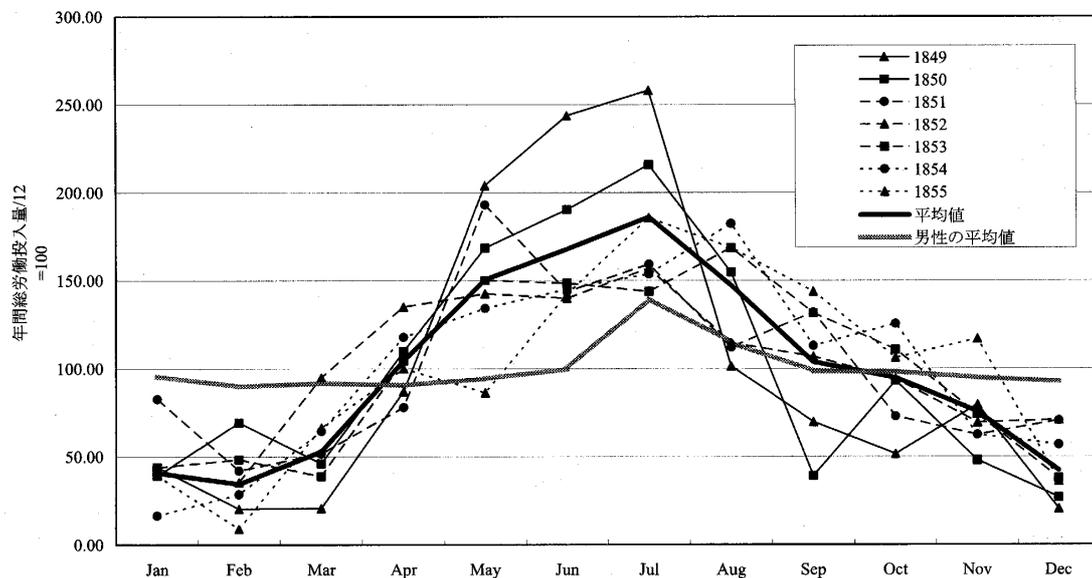


表-4と表-5では、それぞれの労働者について、週の労働日数が4日以上であれば●、それ未満の場合○で表してある。まず目に付くのは、男性労働者の場合は●がほとんどを占めているのに対して、女性労働者では○の割合が圧倒的に多いことである。第二に、男性労働者では、干し草刈りが行われる7月に、大量の季節労働者が見られることに対し、女性の季節労働者は、観察されない。すなわち、この二つの表からの印象は、男女どちらも季節変動はあるものの、夏期の労働需要の高まりは、男性の場合労働者数を増やす、という形で対応がなされるのに対し、女性は人数そのものは増えず、週労働日数を増やすという形での対応であった、というものである。

○の割合が多い点は、バーネットの観察と概ね一致する。トレンタム農場の女性労働者

27) SRO D593/L/6/2/30, Farm Bailiff's Labour Report.

28) SRO D593/N/2/2/24. 月の長さの違い(1月は31日、2月は28日等々)は調整してある。

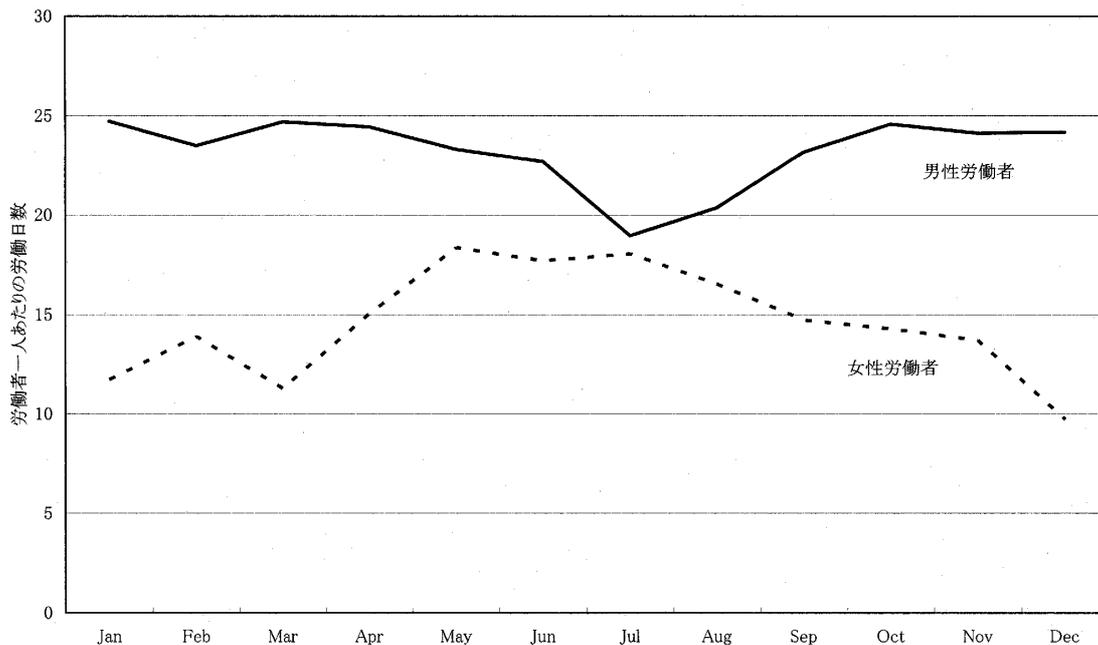
29) 変動係数で見ると、さらに明確で、男性の各月の値を用いた変動係数が0.13に対し、女性のそれは0.56であった。

は、オークス農場の女性よりはレギュラーに働いていたが、男性ほどではなかった。二点目の、明確な季節労働者がいないということは、オークスとはずいぶん異なっている。●が5月から8月にかけて集中しているのは明らかであろう。実際、1849年の農繁期においては、●の割合は倍以上となっている。同年の第18週から32週までの15週間（4月30日から8月12日）について見てみると、第20週を除いて、週総労働投入は100日を越えている。当該時期では、452個のうち348個（77.0%）が●であった。これとは対照的に、他の週では約30%が●であるにすぎない。「夏期」を第18週から第43週での26週間（4月30日から10月28日）でとり、●の割合をまとめたものが、表-6である。1853年を除いて、夏期のほうがパーセンテージが高い。したがって、女性労働者は夏期に、より集約的に働いていたと言えよう。

表-6 表-5における●の割合

	Summer	Winter	Total
1849	68.0%	27.5%	55.6%
1850	71.8%	41.6%	61.6%
1851	73.1%	44.8%	61.8%
1852	77.6%	60.6%	70.7%
1853	73.7%	74.9%	74.0%
1854	76.9%	62.1%	72.1%
1855	65.8%	54.7%	62.2%

図-2 月労働日数（1849年から1855年の平均）



週労働日数の代わりに月間労働日数を指標にとっても、同様のことが確認できる。図-2を見ると、明らかに女性の夏期の労働強度が高まっていることがわかる。他方、男性労働者のそれは、夏期にむしろ低下する。これは、多くの臨時労働者が夏期に短期間のみ働く季節労働者だったことに起因する。つまり、7月の途中から8月の途中まで、というような形で農場で働いた労働者が大量にいる場合、当然ながら、7月と8月の労働者一人当たりの「平均」月労働日数は短くなってしまふ、ということであろう。さて、図-1で見たように、労働投入は夏期に集中していた。したがって、労働需要の急激な上昇に対応するために雇用者の取ったオプションは、労働者の性別によって異なっていたということが出来る。男性労働者の場合、労働者の数を増やして対応し、女性の場合、新たに雇うことはあまりなく、既存の労働者をより多く働かせる、という形で対応していたのである。

4. 家族労働：女性と子ども

前節まで、トレンタム農場の賃金台帳に依拠して分析を進めてきたが、ここでは、1851年センサスの個票を用いて、農業労働者の年齢や世帯構造についての情報も分析に加える。イギリスで最初に近代的なセンサスが行われるのは1801年であり、以後10年ごとに現在まで調査が続けられている。しかし、1831年までの四回のセンサスは教区牧師が自身の教区の住民を数えて中央に報告するという他計式の調査であった。各世帯に世帯票 (household schedules) が配られ、被調査者自らが自分の世帯についての情報を調査票に記入するという自計式が取られるようになるのは、1841年センサス以降のことである。ここでは、1849年から1855年にトレンタム農場で働いていた103名の女性について、1851年センサスの個票 (Census Enumerators' Books)³⁰⁾ を用いて、出産や子育てのタイミングと農場での働き方について考察する。賃金台帳に記載された103名の女性のうち、23名の女性についてセンサス個票で見つけることができた。加えて、この23名の女性のうち、16名の女性については、彼女らの家族の誰かがトレンタム農場で働いていたことがわかった。この16名が含まれる13世帯を中心に、分析を進めていく。しかし、具体的な分析に入る前に、トレンタム教区の一一般的な世帯構造について概観しておこう。

センサス個票からは、トレンタム教区が工業的な教区ではなかったことが明らかである。個票に職業が記載されていた男性のうちもっとも若かったのは12歳の少年で、彼は「Brickmaker's boy」であった。彼を含め、64名の男性が製造業に就いており、12歳以上の男性人口の22.1%を占める³¹⁾。他方、「agricultural labourer」や「farmer」、「gardener」等

30) National Archives (former Public Record Office (PRO), hereafter NA), HO107/2000, ff. 626-647.

31) 主なものは、「brick layer」、「shoemaker」、「blacksmith」、「carpenter」であった。

の農業関連の職業に就いていた者は、単に「labourer」と記載されていた者を含めると50%以上を占める³²⁾。同様に、製造業に就いていた女性も少なく、「dress maker」が5名、「seamstress」が3名、「shoe binder」が2名、「miller」と「milliner」が1名ずつの計12名を数えるのみで、12歳以上の女性人口に占める割合は、わずか4.4%である。また、農業関連の職業が明示されているケースも非常に稀で、7件を数えるのみである³³⁾。もっとも大きいカテゴリーはサーヴァントで、洗濯女 (laundress) を含めて55名がこのカテゴリーに含まれ、12歳以上の女性人口の20.0%を占める。

表-7は世帯構造についてまとめたものであるが、これを見ると、トレンタムの世帯規模は、イングランド農村部の平均よりも大きかったことがわかる。これは、主に配偶者・子ども以外の親族がより多く同居していたことによる。イングランド農村部では100世帯あたり33名なのに対し、トレンタムでは70名弱となっている。トレンタム1では、サーヴァントの数もかなり大きくなっている。これは、19名のサーヴァントを抱えるサザランド公爵家の影響が大きいと思われる。こうした若干特殊と思われる世帯を除いたトレンタム2では、イングランド農村部の平均よりは大きいものの比較的小さい値となっている。以上を要約すると、トレンタムでは農業で失業した場合に他の生計手段となるような製造業がほとんど無かった。また、平均世帯規模は、時としてその世帯にとって従属者となるような配偶者・子ども以外の親族（兄弟姉妹・婿・嫁等）が多かったことから、イングランド農村部全体の平均よりも大きかった。

表-8は、こうした世帯のうち2人以上トレンタム農場で働いていた者がいる17世帯を掲

表-7 100世帯あたりの平均世帯構成員数

	トレンタム1	トレンタム2	イングランド農村部	17世帯の平均
世帯主+配偶者	166	165	171	182
子ども	213	213	210	265
親戚	69	68	33	59
サーヴァント	54	40	33	24
小計	503	486	447	529
同居人	31	22	24	35
合計	533	508	471	565
世帯数	157	153	2,467	17

Source: NA HO107/2000, ff. 626-647 and Table 16.2 in Wall (1983). (ウォール (1988), 表7-2, 270頁。)

Note: トレンタム1は、トレンタム教区の全世帯。トレンタム2では、「Trentham Hall」、「Trentham Hall Laundry」、「Gardeners Rooms」、「Trentham Station」を除いてある。「イングランド農村部」は、ウォール (1988)、表7-2、270頁より。「17世帯」については、本文参照。

32) 「labourer」を除くと、28.7%。

33) 職業欄は「Employed in Agriculture」、「Labourer in field」、「Farmer of 5 acres of land」、「Famrer's Daughter」、「Dairy maid」、「Formerly Servant」、「Invalide[sic] farm servant」とされている。

表-8 労働者とその世帯

名	姓	世帯主との関係	年齢	性	婚姻関係	職業	賃金台帳における年間労働日数							
							1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	
1	Joseph	Snap	Head	24	M	married	Ag. Lab.	312.50	313.00	128.00	0.00	0.00	125.75	0.00
	Hannah	Snap	Wife	22	F	married		85.75	91.75	26.75	0.00	0.00	0.00	0.00
2	Edward	Rheed	Head	44	M	widowed	Ag. Lab.	312.50	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	28.00
	Mary	Rheed	Daughter	14	F	unmarried	At home							
	Edward	Rheed	Son	12	M	unmarried	Scholar							
	Elizabeth	Rheed	Daughter	9	F	unmarried	Scholar							
	James	Wright	Son in law	31	M	married	Labourer	1.00	0.00	9.75	0.00	0.00	0.00	0.00
	Catharine	Wright	Daughter	24	F	married								
	Elizabeth	Wright	Granddaughter	5m	F	unmarried								
3	George	Ball	Head	30	M	married	Cowman	340.00	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Jane	Ball	Wife	31	F	married		27.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	William	Ball	Son	8	M	unmarried	Scholar							
	George	Ball	Son	6	M	unmarried	Scholar							
	John	Ball	Son	4	M	unmarried	Scholar							
	Fanny Jane	Ball	Daughter	1.6m	F	unmarried	At home							
4	John	Tilstone	Head	42	M	married	Ag. Lab.	0.00	100.00	80.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	Jane	Tilstone	Wife	44	F	married		83.25	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	Sarah	Tilstone	Daughter	12	F	unmarried	At home	95.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	George	Tilstone	Son	9	M	unmarried	At home							
	John	Tilstone	Son	6	M	unmarried	At home							
	David	Tilstone	Son	4	M	unmarried								
5	Daniel	Bailey	Head	55	M	married	Lime Burner							
	Sarah	Bailey	Wife	58	F	married								
	John	Patrick	Son in law	32	M	married	Ag. Lab.	26.00	15.50	0.00	0.00	0.00	12.00	0.00
	Rosanna	Patrick	Daughter	30	F	married		41.25	29.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	John	Patrick	Grandson	11	M	unmarried	At home							
	Anne	Patrick	Granddaughter	9	F	unmarried	At home							
	William	Patrick	Grandson	6	M	unmarried	At home							
	Elizabeth	Patrick	Granddaughter	3	F	unmarried	At home							
6	Thomas	Snap	Head	60	M	married	Ag. Lab.	0.00	0.00	0.00	131.25	307.50	312.00	313.00
	Eliza	Snap	Wife	49	F	married		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	40.50	175.00
	Charles	Snap	Son	19	M	unmarried	Servant	0.00	0.00	203.00	315.00	285.75	283.00	279.75
	William	Snap	Son	13	M	unmarried	Scholar	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	101.50
	Anne	Snap	Daughter	9	F	unmarried	Scholar							
7	David	Bailey	Head	60	M	married	Ag. Lab.	307.50	301.00	313.00	314.00	313.00	312.00	289.00
	Sarah	Bailey	Wife	57	F	married								
	Elizabeth	Bailey	Daughter	14	F	unmarried	Scholar	81.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
8	Samuel	Swanwick	Head	41	M	married	Labourer	47.00	53.00	78.50	32.25	0.00	0.00	0.00
	Jane	Swanwick	Wife	29	F	married		25.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	James	Swanwick	Son	8	M	unmarried	Scholar							
	Anne	Swanwick	Daughter	6	F	unmarried	Scholar							
	Thomas	Swanwick	Son	4	M	unmarried	At home							
	Sarah	Swanwick	Daughter	1	F	unmarried	At home							
9	Thomas	Boulton	Head	56	M	unmarried	Ag. Lab.							
	John	Banks	Lodger	43	M	widowed	Ag. Lab.	312.50	313.00	313.00	302.00	313.00	312.00	289.00
	Anne	Banks	Lodger's daughter	14	F	unmarried	At home	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	130.75	169.75
	Henry	Banks	Lodger's son	12	M	unmarried	At home	54.00	0.00	56.00	199.00	344.00	352.50	339.00
	John	Banks	Lodger's son	8	M	unmarried	At home							
	George	Banks	Lodger's son	5	M	unmarried	At home							
10	James	Birkin	Head	41	M	married	Ag. Lab.	312.50	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Charlotte	Birkin	Wife	34	F	married								
	Thomas	Birkin	Son	14	M	unmarried	Scholar							
	William	Birkin	Son	8	M	unmarried	Scholar	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	56.00
	George	Birkin	Son	5	M	unmarried	At home							
11	John	Morgan	Head	47	M	married	Ag. Lab.	311.50	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Sarah	Morgan	Wife	49	F	married								
	Eliza	Morgan	Daughter	19	F	unmarried		16.50	0.00	0.00	16.50	0.00	0.00	0.00
	Ann	Morgan	Daughter	14	F	unmarried								
	Sarah	Morgan	Daughter	11	F	unmarried	Scholar							
	John	Morgan	Son	8	M	unmarried	Scholar							
	William	Morgan	Son	5	M	unmarried	Scholar							
	Emma	Morgan	Daughter	2	F	unmarried								
	James	Mason	Son in law	23	M	married	Labourer	0.00	0.00	0.00	175.00	73.00	0.00	0.00
	Jane	Mason	Daughter	21	F	married		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	63.25	163.25
	Elizabeth	Mason	Granddaughter	5m	F	unmarried								
12	Joseph	Dodds	Head	32	M	unmarried	Farm Bailiff							
	Elizabeth	Dodds	Sister	35	F	unmarried	Housekeeper							
	Ellen	Bailey	Servant	20	F	unmarried	Servant							
	James	Phillips	Servant	21	M	unmarried	Ag. Lab.							
	David	Phillips	Servant	18	M	unmarried	Ag. Lab.	312.50	313.00	272.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	Henry	Cartwright	Servant	19	M	unmarried	Ag. Lab.	55.50	326.00	313.00	314.00	323.25	112.00	0.00

(表-8 つづき)

名	姓	世帯主との関係	年齢	性	婚姻関係	職業	賃金台帳における年間労働日数							
							1849	1850	1851	1852	1853	1854	1855	
13	George	Fallows	Head	30	M	married	Ag. Lab.	312.50	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Mary	Fallows	Wife	38	F	married		88.75	0.00	0.00	0.00	129.25	216.75	48.00
	Anne	Fallows	Daughter	5	F	unmarried								
	Mary	Fallows	Daughter	1	F	unmarried								
14	Shadrack	Ashley	head	50	M	married	Shepherd	313.00	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Elizabeth	Ashley	Wife	46	F	married								
	Joshua	Ashley	Son	20	M	unmarried	Shepherd	365.00	365.00	356.00	313.00	299.00	31.00	0.00
	Alfred	Ashley	Son	17	M	unmarried	Gardener	96.00	109.00	0.00	0.00	185.00	320.00	363.00
	Marinda	Ashley	Daughter	15	F	unmarried	At home							
	Deborah	Ashley	Daughter	11	F	unmarried	Scholar							
	Silas	Ashley	Son	7	M	unmarried								
15	Richard	Middleton	Head	40	M	married	Ag. Lab.	312.50	313.00	313.00	314.00	313.00	312.00	313.00
	Mary	Middleton	Wife	38	F	married		0.00	151.25	19.50	192.00	250.75	200.25	216.50
	Hannah	Middleton	Daughter	9	F	unmarried	Scholar	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	George	Middleton	Son	5	M	unmarried	Scholar							
	Anne	Middleton	Daughter	2	F	unmarried								
16	John	Downing	Head	35	M	married	Ag. Lab.	169.50	284.00	274.00	249.00	280.50	279.00	289.00
	Rachael	Downing	Wife	33	F	married		0.00	0.00	0.00	108.25	254.50	19.50	83.75
	Elizabeth	Johnson	Daughter	14	F	unmarried	Scholar							
	Joseph	Grescott	Lodger	79	M	widowed	Pensioner							
17	George	Simpson	Head	43	M	married	Labourer	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	197.00	158.00
	Hannah	Simpson	Wife	32	F	married		0.00	135.00	186.50	9.00	0.00	0.00	0.00
	Sarah	Simpson	Daughter	11	F	unmarried	Scholar							
	Anne	Simpson	Daughter	7	F	unmarried	Scholar							
	Emma	Simpson	Daughter	5	F	unmarried	Scholar							

Source: SRO D593/N/2/3/24, NA H107/2000, ff. 626-647.

げたものである。その年に彼（女）が農場で働いた場合、年間労働日数を示した。平均世帯規模は5.65人で、トレнтаム全体より大きい（表-7参照）。これは子どもの数が多いことによる。他方、サーヴァントの数は、トレнтаム2よりも小さくなっている。このことから、この17世帯はトレнтаム全体の平均よりも貧しく、より多くの従属的なメンバーを含む世帯であったことがわかる。この特徴は、イングランド農村部の平均と比べると、より顕著である。

夫婦ともに農場で働いていた12組について見てみると、以下の三点が挙げられよう。第一に、彼らは幼い子どもを何人か抱えていた。例えば、John Patrick と Rosanna Patrick の夫婦（世帯番号5）には、1851年時点で4人の子どもがおり、Rosanna が働いていた1849年には、全員10歳以下であった。また、George Ball と Jane Ball（世帯番号3）、John Tilstone と Jane Tilstone（世帯番号4）も同様に、妻が働いていた年には何人か10歳以下の子どもがいた。第二に、妻は一番下の子どもが非常に幼い場合は働かなかったようだ。Mary Fallows（世帯番号13）の就業パターンは、特に興味深い。彼女は1850年から52年の三年間は働いていない。1850年のどこかのタイミングで彼女は二女の Mary を産んだのであるが、3歳になるまで、仕事をしていないのである。同様に、Jane Mason（世帯番号11）も、娘の Elizabeth が3歳になるまで働いていない。第三に、夫婦は一緒に働くことが多く、そうでない場合でも、連続した年に働いていた。これは、夫婦間のみならず、父親と子どもが農場で働いている場合もあてはまる。例外は、George Simpson と Hannah Simpson（世帯番

号17)である。Hannahは1850年から52年に農場で働いていたが、Georgeが働いていたのは1854年以降であった。

要約すると、農場で働こうとする者は、たいてい家族ぐるみで働いており、もし妻が出産・育児などのために働けない場合、就業するかしないか、あるいは育児期間以後農場で就業できるかできないか、はかなり柔軟であった。

5. 小括

本稿で観察された事実は、以下の三点である。第一に、トレンタム農場で働いていた女性労働者は、男性労働者よりはその雇用はカジュアルであったけれども、先行研究が示すほど臨時的な存在ではなかった。第二に、夏期における労働需要の増加に対する対応は、男性と異なって、労働強度を高めるという形でなされた。第三に、センサス個票で見出された女性労働者の多くは、他の家族と一緒に農場で働いていた。また、彼女の夫が農場で働いていた場合、出産・育児に際して、彼女の就業はかなり柔軟であった。

筆者は、別稿でトレンタムにおける男性労働者について分析し、年間労働日数が300日以上になる常雇の労働者と、50日以下の臨時的な労働者とがおり、両者の間では労働需給の決定のメカニズムが異なっていた可能性を示唆した³⁴⁾。中核的な男性労働者は農場の近くに居住し、サザランド公爵所有のコテージに住む者もいて、家賃が免除されているケースもあった³⁵⁾。これに対し、夏期にのみ短期的に雇用される労働者は、市場における賃金率が高い場合は代替としてアイルランド人労働者が雇用されるなど、非常に競争的な性格が見受けられた³⁶⁾。こうした点を考慮すると、トレンタムにおける女性労働のあり方は、この農場の労働需給における家父長的な性格を伺わせる。先行研究で示されるよりも長い年間労働日数や週当たり労働日数、農繁期における労働強化、出産・育児のタイミングに合わせた労働供給の調節といった諸点は、センサス個票で見いだすことができるような定住的な女性労働者についても、男性臨時労働者のようにスポット的に農場で雇用されていたわけではなく、「雇傭主の恩恵に依存しつつ働くというような不完全な市場」³⁷⁾という性格を示唆していると思われる。

10年ほど前に、女性の労働に関する研究の状況について、パメラ・シャープは、「材料は集められたが、ケーキはまだ混ぜられていない」と表現した³⁸⁾。トレンタムにおける女性労働

34) 山本(2002)。

35) 山本(2002)、18頁。

36) 山本(2002)、18-25頁。

37) アシュトン(1973)、143頁。

38) 原文は、'the ingredients have been collected but the cake has yet to be mixed.' Sharpe (1995b), p. 353.

働者の経験も、トレンタムに固有の条件の影響が大きいように思われる。一般化のためには、今後もより多くの個別事例研究が必要とされている。

引用文献

- アシュトン, T. S.,
 (1973) 『産業革命』(中川敬一郎訳) 岩波文庫。
- Burnette, J.,
 (1999) 'Labourers at the Oakes: Changes in the Demand for Female Day-Labourers at a Farm near Sheffield During the Agricultural Revolution,' *Journal of Economic History*, 59 (1).
- Lindert H. and J. G. Williamson,
 (1983) 'English Workers' Living Standards During the Industrial Revolution: A New Look', *Economic History Review* 36 (1).
- Richards, E.,
 (1974) 'Women in the British economy since about 1700: an interpretation,' *History*, 197.
- Saito, O., (1979) 'Who Worked When: Life-time Profiles of Labour Force Participation in Cardington and Corfe Castle in the Late Eighteenth and Mid-nineteenth Centuries,' *Local Population Studies*, 22.
- Snell, K. D. M.,
 (1985) *Annals of the Labouring Poor, Social Change and Agrarian England, 1660-1900*, Cambridge.
- Sharpe, P.,
 (1995a) 'Time and Wages of West Country Workfolks in the Seventeenth and Eighteenth Centuries', *Local Population Studies*, 55.
 (1995b) 'Continuity and Change: Women's History and Economic History in Britain', *Economic History Review*, 48(2).
- Verdon, N.,
 (2002a) 'The rural labour market in the early nineteenth century: Women's and children's employment, family income and the 1834 Poor Law Report', *Economic History Review*, 55(2).
 (2002b) *Rural Women Workers in 19th-Century England: Gender, Work and Wages*, Woodbridge.
- Wall, R.,
 (1983) 'The household: demographic and economic change in England, 1650-1970', in Wall, Robin and Laslett (1983). (リチャード・ウォール「世帯—その人口学のおよび経済的变化、1650-1970年」、斎藤修編著、ピーター・ラスレット他著、『家族と人口の歴史社会学—ケンブリッジ・グループの成果』、リプロポート、1988年所収)
- Wall, R., J. Robin and P. Laslett,
 (1983) *Family forms in historic Europe*, Cambridge.
- 山本千映
 (2002) 「19世紀中期イングランドにおけるふたつの農業労働市場—スタッフオードシャー、トレンタム農場の事例分析—」、『社会経済史学』67巻6号。